言語科学研究第14号（2008年）

斎藤武生先生に教えていただいたこと

酒井　秀貴

今年の３月をもって、斎藤武生先生はご退任になる。そこで大学院修了生、そして斎藤先生の最後の学生として御礼の言葉を申し上げるとともに、先生との思い出や学んだことを述べたいと思う。

斎藤武生先生に初めてお目にかかったのは２００２年の春だった。英語教師になるためにもう一度、英語を学び直そうと思い、聴講生として大学に戻ってきていたが、「現代英文法」が斎藤先生に学ぶ初めての授業であった。見かけ上の定性、不定冠詞の *a /an* には specific と non-specific の２つの種類があることなど自分の知らない知識だけでなく、*can* と *may* の違いなど英文法について疑問に思っていたことが次々と解決していった。斎藤先生の授業を受け、学部時代に自分がいかに不勉強であったかを思い知らされると同時に、授業に楽しさを感じた。毎回の授業は自分にとって楽しみの１つとなった。この授業で英文法に対して一層興味を持つようになり、翌年再び「現代英文法」の授業を受講させて頂くことになった。今度は文法知識だけでなく、*John climbed Mt. Fuji.* と *John climbed up Mt. Fuji.* など似た表現や単語のニュアンスの違いが分かるようになった。また、よく目にする *A Happy New Year* や *X'mas* という表現は正しい英語ではないことを知り、いかに間違った英語が巷にあふれているかを実感させられた。これらの発見によってさらに英語に興味を持つようになり、英語教師になりたいという気持ちもさらに強まっていった。

英語の面白さ、英文法の魅力に惹かれ、もう少し先生の下で英語を勉強したいとの思いを抱き、２００４年に大学院に進学した。ところが、自分の気持ちとは裏腹に、進学後は何をしても以前の調子が出ない状態が続いた。ついに鬱状態に陥って、何も手につかなくなり、結局1年留年することになったが、斎藤先生に対して申し訳ない気持ちで一杯だった。

しかし、そのような学生でも先生は見捨てるようなことはなさらなかった。力不足、そして努力不足の私を忍耐し、1から論文の書き方をご教授下さった。論文の構成の仕方から例文のデータの集め方、参考文献の書き方、見やすい資

料の作り方、論文で使う英語など多岐にわたってご指導いただいた。そればかりでなく、何を書きたいのかさえ分からなくなった私の適性を見極めてアドバイスして下さったり、落ち込んでいる私にいつも温かい言葉も掛けて下さった。そのお陰でどうにか昨年、大学院を修了することができた。斎藤先生のご指導と温かいお言葉なくして大学院修了はなかったと思う。

先に書いたとおり斎藤先生から様々なことを学んだが、もっとも記憶に残っているのは critical thinking である。私は、教師が言ったことや教科書で書いてあることをすぐに鵜呑みにしてしまう傾向が強かった。斎藤先生のご指導のお陰でそのような傾向から抜け出しつつある。現在、未熟ながら高校で英語教員をさせて頂いているが、教材に書いてあることを批判的に見ながら教材研究をする習慣が身についてきて、以前よりも深く教材研究ができるようになった。今度は私が生徒たちに critical thinking の大切さを伝えていきたいと考えている。

斎藤先生、本当にこれまでありがとうございました。ご退任後も、変わらずお元気にご活躍くださいますよう、心よりお祈りいたします。